

生田長江『明治文学概説』：日本近代文学 史叙述の研究(3)

吉田, 栄治

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

96

(終了ページ / End Page)

102

(発行年 / Year)

1961-12-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019046>

生田長江

『明治文学概説』

吉田 栄 治

生田長江は文芸批評家・思想家としては、時代思潮に満足せず、たえず異を唱えるに急である傾向が強く、また、つねに時流から一歩をさきんじようという意欲に燃えていた点で、きわめて異色ある存在であったといえる。かれの業績は文芸・思想問題をはじめ社会問題におよぶ多方面にわたる活発な批評・翻訳・創作活動によって知られているが、そのような多彩なかれの活動についての批判的検討はひとまずおいて、ここではかれが『日本文学講座』（大正一五―昭和三年新潮社刊）第五巻に書いた『明治文学概説』をとりあげ、それが日本近代文学史叙述の基礎をきりひろく途上においてはたした役割について述べたいと思う。

明治文学研究は大正末期ごろから、その初期の文献、資料の蒐集や整理に重点がおかれていたいわば平面的な研究の段階から、新しい文学意識や観点に立っていわば立体的におしすすめていこうとする段階にいたったということが出来る。そうした新しい動向を促し

があり、これにつづくものとしてここでとりあげる長江の『明治文学概説』、平林初之輔の『社会史的観点より見たる明治文学』（『日本文学講座』所収）、片岡良一の『現代文学諸相の概観』（国語と国文学 昭和四・四）等をかぞえることができる。宮島の『十二講』についてはすでに本誌第六号で立入った紹介と評価がなされているので、ここで繰返して述べる手間は省くが、それが明治文学研究に意識的な一転向を促した新しさは要するに文学と一般的文化の横の關係と文学相互の縦の關係が統一的に論じられ、文学と一般的文化と外的事象（社会とか政治）の關係が一応立体的に把握されていたところにあったといえる。従来の文学史もむろんそうした關係について触れてはいたが、一般的文化と文学、社会と文学との關係がこの『十二講』ほど意識的に追及されてはいなかった。ここに宮島の文学史論の観点の特色が認められるのである。

この宮島の観点をさらに一歩おしすすめて、文学を社会的生産とみる唯物史観の立場から明治文学の再検討を試みたのが、平林の『社会史的観点より見たる明治文学』であった。これは『小説神髓』の出現までしか論じられておらず、文学史叙述としてはきわめて不完全なものではあったが、その意図したところは従来のそれに見られぬ新鮮なものであった。平林の論の展開を理解する参考としてつぎにその項目を掲げておく。

- (一) 明治維新の世界史的意義
- (二) 明治維新の国内史的意義
- (三) 伝統的旧文学の没落行程
- (四) 西洋新文明の流入

宮島、平林の観点にたいして長江の立場は対蹠的である。すなわちかれは明治文学を歴史的研究所の対象とする以上は、文学史上の各時代を文学そのものの展開発展における転換に一時代を画すべきだと主張するのである。「文学史上の各時期を文学その物の展開過程における重要な一つの転向から、他の新しき一転向に至る間のものとしてのみ取るのである。換言すれば、文学界その物の内部に一つの顕著なる新風潮新傾向を生じたと見えるところに一時期の発端を置き、その傾向風潮が稀薄になり、もしくは消滅し去って、更に今一つ新しき傾向風潮がめざましく頭を持ち上げて来るところに、右の時期の結末を置き、同時に次ぎの時期の発端を置くのである」。このようにかれは一般の歴史、または文化の歴史における時代区分をそのまま文学史上の時代区分として用いる方法、政治とか経済とか社会とかいう外的な事象と文学との相互関係を重視して文学史上の時代区分をそうした一般的な外的事象の歴史における時代区分に応じて区分する方法のいづれをも排除するのである。しかし、文学それ自身の展開や動向が文学のみの孤立的なものではないことはいうまでもない。むしろ長江も文学と他のより根本的な文化もしくは政治経済等のごとき外的事象との相互影響、関係を全く無視はしていない。要するに文学を主体としてつかむか、それとも外的事象（政治とか社会とか一般文化）との相互関係を重視してそこに文学の位置を決定するかということである。長江はその前者をとったのである。このように文学そのものの立場に立ってそのなかに観取される移発展にそくして時代区分を行なう態度は、いうまでもなく岩城

（大正三）高須芳次郎『日本現代文学十二講』（同一）小島徳弥『明治大正新文学史観』（註1）——において共通してとられた態度であった。だから長江の態度は従来のその延長として位置づけられる。文学と一般的文化と外的事象との相互関係を十分に認識する宮島の観点、あるいはそれよりも一步をすすめて文学をたんに一般社会の事象と見るのではなくして、それを出发点として統一的な社会の歴史的発展の過程のうちにあつて、さまざまな社会事象との関係において文学の位置を明確にせねばならぬという平林の観点が、それぞれ従来の文学史論に一つの転換を促さんとしているのに比べてみるならば、長江のそれは旧態の踏襲にすぎないかのように思われる。たしかにそれは踏襲ではあったが、たんなる踏襲ではなくしてむしろその徹底化であった、というべきである。そこに宮島や平林らによって導入された観点にたいする反撥や異議が含まれていたことはいうまでもない。しかし同時にそれは長江独自の見解を提示するものでもあったのである。ともあれかかる見地に立って、かれは明治文学の発展段階をつぎのように六時期に区分するのである。（註2）

- (一) 混沌期
 - (二) 第一播種期（又は準備期）
 - (三) 第一收穫期（又は満開期）
 - (四) 第二播種期
 - (五) 第二收穫期
 - (六) 第三播種期
- これをそれぞれ年代別に区分して、(一)混沌期は明治初年より一〇

年ごろまで、(一)第一播種期は、政治小説の流行より『小説神髓』『書生気質』の出現した二〇年ごろまで、したがってつぎの(二)の準備期ともいわれる。(三)第一収穫期は、尾崎紅葉・幸田露伴の出現から新体詩の一応の成熟、正岡子規の俳句の革新、与謝野鉄幹の登場などにいたるまでの二〇年ごろより三二、三年ないしは三四、五年ごろまでの期間。(四)第二播種期は、三二、三年ないしは三四、五年ごろより四〇年ごろまでの間で、「皮相的に見ると、前時期の人々が引きつゞき同様の活動をつゞけてゐるやうに見え、私の所謂第二収穫期の花形がもうかなりの仕事をしてゐたらしくも見えるであらうが、深くこの時期を吟味して見れば、前の時期を支配してゐた根本精神は、或はあきらられ、或は否定されてしまつてゐるとともに、来るべき時期の中心生命となるべきものは、まだまだ僅かに胎生的な状態で存在してゐるにすぎない」と長江は書いてゐる。(五)第二収穫期は、自然主義文学勃興期の四〇年ごろより大正五、六年ないしは七、八年ごろまでの期間で、白樺派とか人道主義とか、新浪漫主義とか新理想主義とか、新現実主義とかいうような流派がはなやかに開花したところまでを包括する。「その所謂自然主義的風潮にのみ重きを置く多くの人々が、その衰微に乗じて、享樂主義だとか、人道主義だとかいふ風なものゝ現れた処に、この時期の終りを置かうとするのには、私は同ずることができない」とかれは書いてゐる。(六)第三播種期は、大正七、八年ごろより、かれが『明治文学概説』を書いた昭和元年ごろまでで、個人主義文学がようやく行きつまりに達した時期から、新興文学としてのプロレタリア文学とか農民文学などが注目をあつめて来た時期をさす。この第三播種期

この時代区分のたて方が文学そのものの推移発展にそくしてなされたものであることは、「播種期」「収穫期」という呼称によつてもうかがうことができるが、従来の文学史と比べてまづなによりも注目すべき特徴は、白樺派から新現実派以降、プロレタリア文学が抬頭して来た大正末期までをも包含して明治文学として一括してゐること、(従来は大正文学とよんでいた)、つまり(四)第二収穫期という区画をたてて、自然主義も白樺派も新浪漫派も新現実派も、ともに同一範ちやうに包括してゐる点である。これは先行の諸文学史の時代区分との著しい相違点である。(そこは長江の独自の把握が示されてゐるわけだが、それについては後に触れる)ともあれ、これまでの文学史が明治時代とか大正期とかいう区画にとらわれて、そのワクでもつて文学の推移を区切つてゐたのになつて、かれは文学史上の時代区分は文学そのものの展開発展における転換に一時期を画すべきであるという立場に立つてゐるのだから。明治大正を通じて——一つの期間として考察したのは当然なことである。明治という時代が、もともと独立して考えられるよりも、明治大正と一つの期間として考察されるにふさわしい性質を少なからず内包してゐた時代だから——それだけ大正期との間に明確な一線を画することは困難である——また文学を全く外的な時代の推移の名称でもつて区分するだけならばそれも無意味なことだから、その意味で長江のような見方も一応は成立してゐるといえる。

さて長江の対象(明治文学)にたいする根本的態度がこのようなものであるからには、その叙述の眼目となるべきところが明治文学の複雑な展開の諸相をその背景となつた時代思潮(もっとも根本的)との有機的な関連において追及し、そうした追及をとおして

この巨視的に明治文学の発展を眺望し、その推移を跡づけていくというところにあったことはあらためていうまでもあるまい。長江が意図したことはもっぱら考察の焦点を文学の展開を根本的な時代思潮との関係にしぼって、明治文学の骨格をもっとも本質的なところで明らかにしてゆくところにあった。したがってここでは個々の作家、作品、文学流派等にたいする具体的な分析とか位置づけとかはいっさい行なわれておらず、まさにそれは「概説」的記述にすぎないだがこのように明治文学の多趣多様な進展と複雑な発展の筋道をその本質的な基盤そのものに立入って追及しようという試みは、むしろ従来にないきわめてユニークなものであり、その意味で注目し得べきものといえる。それはまた観点や方法において宮島や平林とは全く異なるものであったけれど、明治文学研究の進展に寄与した点で同様の評価が与えられるべきであり、長江の業績のなかでも注目すべきものに数えられてよい。

明治文学の発展を考えるばあい、その背景となった時代思潮として、明治の伝統的精神である対外的国家主義を度外視してそれを考察することはできない、というのが長江の認識の根本である。かれは書いている。「幕末より明治の末年にかけて、約半紀の久しきに亘り、総体としての日本人の生活に、最も根本的な、最も中軸的な、最も著しい特徴をなしてゐたのは、対外的国家主義の、或は軍国主義的愛国心の異常なる持続的緊張であつた」「対外国愛国心はあらゆる破壊と建設とに於ける根本原理として、最高標準として、半世紀に亘る明治時代の日本人の生活を指導し支配した」と。そして国家主義・対外的愛国心の緊張の持続のなかで発展した明治文学の推移とその背景となった時代思潮の変転をつぎのように跡づけるので

ある。(一)混沌期は維新直後の急激な社会状態の変動にともなう文学軽視と、時勢から脱落したものの自己欺瞞的作品のみが氾濫した。「旧時代をそのままに延長したと思はれるやうな物さへ碌々なく、少なくとも余りにも貧弱な、影の薄い踏襲たるに止まって居り、新時代の準備とか前兆とかになりさうな物に至っては、更に一層見当らない」時期。(二)第一播種期は日本を近代国家として確立し、その国際的地位を一累卵の危きより救はんが為「にまづ着手された対外的文化(政治・経済等の)改革熱が生んだ欧化的風潮の勃興とともに、欧米文学の薄浅にして幼稚なる輸入によって新文学の建設が始つた時期。『小説神髓』『書生氣質』については意識して企てられた文学的播種として最大の播種の貢献をはたしたという評価を与えていゝる。(三)第一收穫期は、前期の欧化的風潮にたいする反省から国粹保存的・反動思潮の支配した時代。二葉草の『浮雲』によって幕をあけた前半は、『小説神髓』によってまかれた写実主義理論が、紅葉美妙等に代表される写実主義的な客観描写的な文学として結実し、一方露伴等に代表される理想主義・浪漫主義の抬頭はあつたにしても、一応前者が文壇の中心勢力を占め、後半になると新体詩の成熟、俳句短歌の革新などに見える抒情的傾向に應じた浪漫主義的理想主義的な思想が優勢になつたと概括している。そしてこの第一收穫期にいたるまでは、日本人が維新以来、生活の最高原理、最高標準としていた対外的愛国心、国家主義的情熱を保持して、たためないかに欧米文化を輸入し模倣するといつたところでそれが一定の限界を越えず、ことに精神的内面的な近代化は皆無に等しい時期であつたと長江は述べている。しかしこうした長江の見解は正しいであろうか。なるほどかれのいうごとく、この時期は国家主義的・反動思潮が

支配的であり、硯友社の擬似近代文学が文壇を占有していたことは疑いないが、反面その考察では二葉亭や透谷や文学界グループの先駆的業績は全く見落されているのである。この点でかれの考察には従来の文学史よりほとんど進歩の跡は見られない。

つぎの、第二播種期では、明治の伝統的精神ともいうべき国家主義的精神がこれまでの持続的緊張から解放され、その反動としてここに時代思潮は新たな転換期にさしかかったと長江は述べている。

すなわち新しい「個人主義的近代思想」の萌芽である。そしてそれは三〇年代の前半においては樗牛等の少数の先駆的先覚者のものにとすぎなかったが、やがて日露戦争の勝利を転機として漸次有力な潮流となって発展してゆくというのである。長江はつぎのように書いている。「一たびさうした最高原理、最終標準をなくし、或はこれにかえる新しく利己主義をもって来たところの、日露戦争後の年若き日本人等は、それまでと全く異って、善い意味にも悪い意味にも、ずっとより自由思想的な態度で以て、欧羅巴文化の底の底までくぐり入り、そしてそこから所謂個人主義的的自我主義を中心にした『近代思想』を持ち帰るやうになつたのである」と。したがってこの時期を国家主義的思潮から近代的な個人主義的的自我主義的思潮への推移の時期と規定するのである。そしてその外面的形式や風俗をのみ近代化するに多忙であつた明治日本が、この時期にいたつて国家主義精神のくびきを脱して、ようやく内面的精神的な近代化の過程にすすみはじめてゆく先駆的もしくは陣痛的な特色が示されているがゆえに第二播種期とよぶのである。この新しい「個人主義的自我主義的近代思想」の胎動を前にして、紅葉露伴等のごときはほ

天外、小栗風葉らはともかくも新思潮の一端を捕捉して、新機運を導こうと力をつくし、若き園木田独歩、田山花袋らはその作品に「生硬さ、稚拙さを余りにも痛々しく暴露一しながらもそこに出発点を求めて努力していたというのが長江のこの時期の文学動向についての根本的な認識である。この新しい思潮はしかし「僅かに一脈の暗流として、文壇の底を、底の底を物凄く渦巻き流れてゐたにすぎない」ものではあつたが、日露戦争の勝利を契機に国家主義的緊張がゆるんだとき、その反動としてはじめてそれが国民全体に理解される基盤が生れて、やがて広く国民に自覚されるようになり、文芸上では自然主義文学となつて開花し、いわゆる第二収穫期をむかえることになる。——したがつてこの「個人主義的近代思想」の萌芽が三〇年代の文学の背景ともなり、根軸ともなつていたことを洞察しなければ、第二収穫期における自然主義その他の文学の本質をも根本的傾向をも、全く理解できないと強調するのである。このように三〇年代の文学動向を、時代思潮が近代的自我精神の確立に向つて動きはじめていた点にウェイトを置いて照らし出していこうとしているところに、この時期の文学を一口に浪漫主義といつて位置づけて評価して来た従来の文学史の見解との著しい相違点が見出されるわけである。むしろ長江もこの時期に浪漫主義風潮が有力であつたことを認めないわけではない。しかし三〇年代の文学を浪漫主義と一括して、近代的個人主義思想の時代思潮の進展を過少に評価するならば、四〇年代に自然主義その他さまざまなかたちでもっていっせいに開花結実した文学の本質を正しくとらえることができな

いのだから、そうした従来なされて来た叙述は表面的な現象や外面的傾向のみをもちかれた皮相な見解であると批判するのである。

このような長江の見解は、たしかに従来のそれに比べて文学の進展をより根本的なところにまで立入って考察したものといつてよい。三〇年代から四〇年への文学の推移の脈絡が一応そこでは論理的に明らかにされているといえよう。しかしこのかれの考察が、一貫性をもった近代的個人主義自我主義の成長過程の歴史解明となるには二葉亭の『浮雲』の意義、透谷とそれにつながる「文学界」の浪漫主義の先駆的意義についての積極的な究明が必要であったこというまでもあるまい。二葉亭や透谷等が果たした先駆的意義については、すでに『明治文学講話』によってかなりの程度の把握と評価がなされていたのだから、そうした先行文学史の達成をもっと正しくくみとるべきであつたらう。

ところでこの『明治文学概説』の特徴がもっとも端的に示されているのはやはり第二収穫期の叙述である。それは第二播種期で準備された個人主義的自我主義的近代思想が徹底的に進展し確立した時期として位置づけられる。その意味において島崎藤村と岩野泡鳴、田山花袋と正宗白鳥、徳田秋声と真山青果等々の作家がその資質や傾向を異にし、互に排除しあい否定しあつてきた多趣多様も矛盾撞着も「個人主義自我主義を中軸とするところの近代思想」を根本思想とする共通の基盤の上に立つさまざまな文学表現にすぎなかつたように、夏目漱石も、永井荷風や谷崎潤一郎も、武者小路実篤も、あるいは佐藤春夫や芥川竜之介や宇野浩二等々の作家もそれぞれきわだった個性的特色を發揮しながら、じつは同じ基盤の上にひらいたものであつて、一見自然主義に激しく対立し、それをのりこえようとした諸流派の活動も、その本質をみるならば自然主義と変らぬ全

く社会意識を欠いた近代的個人主義思想を母胎として生れて来たものであると概括する。たとえば自然主義を否定せんとした白樺派の人道主義的、理想主義的作品もその思想的内容から見てもすでにそれよりもさらに一步つっこんだ真剣な芦花、尚江があつたのだから、決して新しいものとはいえないのであつて、それが文壇的評価を獲得しえたのはただ「表現形式上に清新潑刺」なるところを見せたがためであつて、白樺派の出現にはそれほどの意義を認める必然性はないと断言するのである。

これもまた従来の文学史叙述に見られない興味ある考察である。自然主義およびそれ以降の諸文学流派を一個人的自我主義を中軸とする近代思想」を根本思潮とする同一の基盤の上に開花したものであるという指摘は近代文学の本質ないしは基本的理念を規定したものと正しくすべきであらう。この時期に文壇に出現した多様な流派や諸傾向も、また藤村も花袋も、泡鳴も、白鳥も、漱石も荷風も、武者小路も志賀も、その他もろもろの作家たちもその基調とした思想的骨格に立入ってみるならば、それは近代的個人主義思想を基本的中枢的理念としたところの近代的個人主義文学のさまざまな個性的表現であつたのだから。その意味で長江が自然主義を近代的個人主義文学の最初の結実と位置づけそれ以降の白樺流より新現実派にいたる文学流動のすべてをこめて「個人主義自我主義を中軸とした近代思想」を根軸とする文学という規定を与えたことにあまりはない。従来の文学史がとかく表面にあらわれた傾向や風潮の差異に目を奪われてその根本にまで追及の目をむけなかつた弱点を考ふるならば、なるほど長江の考察は鋭く本質をついていることは疑いない。しかし自然主義とそれ以降の諸文学動向をこのように一

括してしまうこと、また、たとえば白樺派の斬新さを説明するのにはただ表現形式上の革新とか技巧上の新風とかいうだけの評価が、果たして事実に徴して正しいといえるだろうか。白樺派もその他の諸文学動向も、自然主義と共通の質の基盤に生れた近代文学であることにまちがいはないとしても、じっさいにはその基盤そのものが成熟し展開しているのである。その過程を基盤そのものに立入って追及し究明することなしには近代文学の展開の多様なすがたも複雑な発展の筋道もともに正しく理解し位置づけることはできないはずである。そうした綿密な検討が全く欠けている長江の把握は雑バクのもしりをまぬがれないことはできない。最後に長江の個人主義文学にたいする評価にふれておく。かれは個人主義文学にたいして社会的意識が全く欠けていたと批判している。しかしこれはおかしい。なんらかの形で社会と相渉らぬ個人主義自我主義の主張はありえないはずである。その相渉り方を問題にすべきであった。またかれはその個人主義文学のゆきづまりを批判的にのりこえる新文学として「社会意識」をもった民衆芸術論、労農文学の抬頭を意義づけている。(第三播種期)しかしかれの立場は近代思想を日本的伝統主義、国家主義の方向へ超克しようとする超近代主義、超個人主義思想——そこに資本主義文明の頽廢にたいする批判的側面が含まれてはいるが——であり、きわめてネガティブである。結局、長江は、この立場に立って個人主義文学の展開を史的に位置づけているのである。したがってここでは個人主義文学の近代的人間主義的内容は十分にくみとられなかったのである。

註1 長江の明治文学発展の基本的脈絡の把握と先行文学史のそ

島の『新文学史観』の時代区分を掲げておく。

『現代文学十二講』

- 第一期旧様踏襲時代(明治初年—一八、九年)
- 第二期新文学の發生時代(一八、九年—日清戦争前後)
- 第三期ロマンチズム時代(日清戦争時代—日露戦争時代)
- 第四期自然主義時代(日露戦争前後—明治末年)
- 第五期各派対立時代(大正元年—一〇年)

(上篇)第一章啓蒙運動と新文学の曙光 第二章東西思想の交錯と明治文学の樹立 第三章明治文学の爛熟と浪漫主義の運動 第四章明治詩歌及び俳句の革新 (下篇)第五章自然主義文学の全盛時代 第六章非自然派説と新浪漫主義的傾向 第七章章混沌たる大正文学界への展望 (『新文学史観』)

註2 この長江の時代区画より一步外的文化を重く見て、この点より明治文学史を論じたものとして片岡良一の『明治文学史概説』(岩波講座日本文学 昭和六年)がある。

- 第一期黎明期(明治元年—一〇年前後)
- 第二期自覚期(一一年頃—二一、二年頃)
- 第三期反動期(二一、二年頃—二五、六年頃)
- 第四期過渡期(二六、七年頃—三七、八年頃)
- 第五期確立期(三八、九年頃—四二、三年頃)
- 第六期成長期(四三年頃—大正四、五年頃)

根本的な点においては長江と同じ立場にあるといえるが、より時代思潮を醸成したところの社会情勢を重く見て、注目される。

註3 長江はこの時期は「浪漫主義の風潮とリアリズムの風潮とは、殆ど何れを主とも何れを従とも云ひがたく、時には相混りながら此時代の底を流れ進んでみた(『写生文』)については近代思潮の意義をもったリアリズムと評価している」といわれているが、この見解は宮島の「理想主義と写実主義との対立期」という把握とだいたいにおいて類似しているといえよう。